書評

堀竹忠晃著

『平家物語論序説』

佐伯真一

著者が昭和五十年代に「日本文芸学」等々を舞台として次々に発表された論稿を集めた論文集である。近年、平家物語研究は多様な展開を見せており、研究書の刊行も相次いでいるが、そうした中で著者の研究姿勢の最も際立った特徴は、文芸学の正統的な流れを受け継いで、作品の文芸性、文学的価値を正面から問わんとする姿勢を一貫して堅持されてきたことにあると思われる。ここ二十五年程の平家物語研究が、諸本論や古態論・原態論、及び説話論ないし説話「管理者」論等を中心に、成立論的な関心にやや傾斜しつつ展開されてきた中で、作品の文芸性に真っ向から切り込まんとする著者の一貫した姿勢は貴重であり、文学研究とは何かという根本問題に関わる問いを、研究者に投げかけていると言えよう。

とりわけ、著者の独自性は、現在、常識的な評価としてほぼ定着した感のある覚一本の「達成」に疑問を呈するところにある。著者自身が本書の「あとがき」で述べるように、その点の追究が、質量両面において本書の中心を占めていると言って良かろう。第五章「『平家物語』（覚一本）の非文芸的側面」という表題が、その問題意識を最も端的に語っているが、この章のみならず、本書の各所に覚一本の評価に対して疑問を呈示した箇所が見受けられ、さらに、覚一本の「非文芸的側面」に言及しないまでも、「覚一本の達成」という既成の評価に安住せず、独自の評価を下してゆこうとする著者の基本姿勢は、本書を一貫して支えているものと思われる。現在、覚一本評価の定着によって、研究者の間には、「覚一本の達成」というところに結論を持ってゆきさえすれば一件落着するとでも言ったようなムード、あるいは、他の諸本が「覚一本の達成」を言うための引き立て役的な材料としてのみ検討されるかのような傾向さえ無いわけではない。そうした中で、既成の評価に安易によりかからず、独自の視点を確保せんとする態度は貴重なものであろう。

そうした態度は、具体的には、たとえば第二章では「宇治川先陣」における畠山重忠の形象について、

「延慶本」の叙述の方が、より歴史的真実性をそなえた描き方をしていると思う。（中略）歴史的真実に近い表現をかりに「リアリティ」という言葉で評するならば、「覚一本」より延慶本その他の読み本の方が、リアリティを強くそなえているともいえる。（七〇頁）

あるいは第五章では「内裏炎上」における時忠の形象について、

上卿として臨む時忠の心情が問題にされず、時忠の行為のみが描写される「覚一本」の方法は、やはり人物描写としては

一面的で、片寄りがあり、真実性に欠ける恨みがあるのではなかろうか。その点で、時忠の心情に立ち入って彼の行為を描く「延慶本」の方が、まだ「覚一本」に比較して歴史的真実性を備えているというべきである。（一〇三頁）

また、同じ章で「祇王」における清盛の形象について、

仏を抱いて帳台の内へはいる行為は、もとより優美さを好む「覚一本」の編者にとっては、露骨で卑猥な行為かも知れぬが、清盛の直情径行の性格を巧みに表していると思う。その点「覚一本」は清盛の造型に、「屋代本」や「延慶本」等と比較した場合、温和な態度を示している。しかし、そのことが逆に清盛の人物造型の面で、リアルを欠く結果になったと思われるのである。（一〇五頁）

さらに、第六章では、「小教訓」における重盛造型について、源平闘諍録等と対比して、

「覚一本」では清盛は最初から何も言わないので、重盛は自分の意見を言いまくった形になり、成親の死罪撤回がいかに困難であるかの印象をも与えないし、かえって清盛に対して重盛が、いかに超人的であるかの感を与えて、現実的緊迫感に欠ける恨みがある。（一一一頁）

といった形で表現される。要するに、延慶本や四部本・闘諍録等の読み本系諸本、及び屋代本等と対比して、「歴史的真実性」「リアリティ」「現実感」といったものが覚一本に欠けている――という指摘として要約することができよう。第六章では、

重盛像に関する限り、「覚一本」は文学的達成とはいえず、むしろ、それは文学における真実性の喪失、あるいは、挫折（ここまで言うべきかどうかのとまどいを感じるが）ということになろう。そして「四部本」や「闘諍録」等の読み本系の諸本の方が、より具象性に富んでおり、リアリスティックであるといえる。（一〇八頁）

とも述べられているが、重盛像の問題に限らず、「覚一本の非文芸的側面」に対する著者の追究は、基本的にはこうした論理によって貫かれていると見られる。

こうした指摘は、前述したように現在の研究状況の中で貴重であると同時に、基本的に正当なものと思われる。読み本系、あるいは覚一本以前の初期諸本と目される諸本には、しばしば生々しいリアルな描写が見受けられるのであり、比較して見た時に、覚一本の整った叙述が空々しいものに感じられることは少なくない。「覚一本の達成」という常識的な評価もそうした点において相対化される必要があるはずで、その意味で著者の指摘は正しく評価されねばならないであろう。

ただ、欲を言えば、「歴史的真実性」「リアリティ」等といった言葉で評価される、それら非・覚一本的な要素も、その内実を問うならば必ずしも一様ではないはずで、たとえば、「忠度都落」において門を閉じて震えている俊成を描くことが事件の実際の状況に近かったであろうということ（第一章）と、「祇王」において仏を帳台に連れ込む清盛を描くことが生々しい現実味を感じさ

せるということとは、同じ「現実性」「リアリティ」という言葉を用い得たとしても、必ずしも同じ意味ではあるまい。読み本系から感じられる「リアリティ」には種々の要素があると思われる。たとえば、延慶本等が歴史的現実により密着しているが故に保持している迫真感、ドキュメント的真実味（水原一氏が「歴史的関連」として呈示する読解や小林美和氏の所謂「史的風土性」に関わる問題）といったものと、読み本系一般に見てとれる心情描写の覚一本とは異なった性格（山下宏明・兵藤裕己・今井正之助等々の各氏が問題とした「内面的屈折」の問題）と、さらに、盛衰記に至って特に顕著になる詳細な描写・細部へのこだわり（松尾葦江氏の所謂「饒舌さ」）とは、各々重なり合いながら、微妙にずれて、「リアリズム」の一言では包括し切れないものを感じさせる。本書は覚一本の文芸性を問うという問題意識を基調とするので、それ以外の諸本の読解に深入りすることは避けられたものであろうが、その他の諸本の「文芸性」を部分的にせよ覚一本以上に評価する以上は、そうした考察も必要となってくるかも知れず（たとえば盛衰記が時として見せる露悪趣味をどう「評価」するか等）、今後の研究の進展に期待したい。

また、覚一本のみの問題の範囲内でも、そうした「非文芸性」と従来様々に指摘されてきた「文芸的達成」とが如何に有機的に関連するのか、その統一的把握、あるいは両者を共に生み出すメカニズムの解明が必要となるであろう。両者は表裏一体のものであるはずだ。その点については、たとえば前引の「宇治川先陣」における畠山重忠の形象について

「覚一本」の手法を何と呼んでよいものか。ある状況の本質的な物質を巧みに取り出し、それを純粋に濾過して、エキスのみを持ってきたとしたら、このような人物像が出来上るのかも知れない。現実をある意味では象徴化しているような手法であろう。（六九頁）

といった指摘がある。これは覚一本の一面を鋭く捉えた評言と言うべきであろう。延慶本等に見える「リアリティ」を削り落としつつも、覚一本が目指したのは、こうした「象徴化」という言葉に表されるものであったろう。それは、部分により、また分析の視点によっては、「様式化」「典型化」「集約化」「理想化」等々の言葉で置き換え得るかも知れない。私見に過ぎないが、覚一本の「達成」と「非文芸性」とを統一的に把握するためには、こうした言葉で表されるような、覚一本（ないし語り本）の方法そのものを、より詳しく分析する必要があると思う。一面でリアリティを喪失しつつ、一面では作品世界の中に聴き手・読み手を同化させる感動的な叙述を生み出したのは、共にそのような覚一本なりの方法の功罪であったと思われるからである。

その点に関連して、第一章には、平家物語の編者や語り手について、世阿弥の物真似と同じ立場にあったものと捉えた上で、

彼らは『平家物語』に登場してくる人物の行動や心情をその人物に即してできるだけ、その人物になりきることに努めた。『平家物語』は平氏の没落という悲劇的運命を全体とし

て描いたものであるから、その平氏の没落と悲劇的運命を、物悲しく悲哀に満ちたものとして、語ることがとりもなおさず、聴衆の期待に応えることではなかったか。（五一頁）

との指摘もある。「あはれ」の語に対する分析から導かれたこのような考察は、第四章「『平家物語』の無常観」にも深く関わり、作品世界にのめり込んだ編者や語り手による登場人物への同化ないし同情・哀憐が、叙情性にも結びつく「物語としての方法」として把握されている。無常観については、第一章（五一頁）と第四章（八七頁）とで、評価に幾分かのずれがあるようにも見受けられるが、要するに、無常観は当時の常識的な思想であるとしても、作品の内部に深く浸透したものであり、それが覚一本の「叙情的側面」と深く関わっている――といったあたりが、著者の言わんとする所であろう。つまり、そのような「物語としての方法」が、思想にも深く関わる問題として捉えられているのであり、「叙情性」と「文芸性」さらに思想性といった各々の側面が有機的な関連のもとに把握されんとしていると読め、その分析の方向性に共感させられるのである。ただ、そのような分析が、先に述べたような「非文芸性」と如何に関わるのか、今一つ論及に乏しく、また、右のようにやや強引に要約してしまったものの、各章・各部分の分析の相互の関連が十分に整理されてまとめられているとは必ずしも言えない点は、一冊の研究書のまとまりという意味では、瑕瑾を残した感もある。

全くの私見だが、そもそも文学作品への「評価」を下すということは、即ち評価する側の評価軸が問われることであると思われる。重要なのは、結論としてどの作品を（あるいはどの異本を）高く評価するかということ自体よりも、如何なる基準によって評価を下すのか、その展望を示すことではなかろうか。極端に言えば、複数の作品や異本のうち、どれを高く評価するかという結論自体は、単なる好悪の主観のみによってさえ下し得るからである。無論、本書の下す評価は、そのような素朴なものではなく、右に見たように覚一本の方法への深い洞察によって裏付けられたものであり、またその結論も大方の平家物語読者の共感を呼ぶに足るものと思われるが、なお突っ込んだ分析を、無いものねだりのように求めてしまうのは、そのような私の主観的な思いによっている。たとえば、本書にも引かれているように、覚一本に比べての初期諸本のリアリティの問題をいち早く指摘した高木市之助「中世展望――平家の窓から――」（一九六〇初出）においては、覚一本の「様式美」が西尾実の所謂「中世的なもの」として完成されてゆくのに対して、初期諸本の「古態のリアリズム」は「中世をとおしてついに挫折におわった未完成者」であるといった展望につながっている。あるいは、永積安明氏の屋代本・覚一本評価が、日本中世における叙事詩的なものを求める評価軸にのっっていることは言うまでもない。本書においては、それらの先行の研究に対する肯定なり批判なりの論述は必ずしも多くはない。無論、先行論文を直接引用したり論評したりする形式を求めているわけではないが、そうした近似的問題を扱う先行の研究に対し

て、どのような展望を用意された覚一本評価であるのか、尋ねてみたい誘惑を禁じ得ないのである。さらに言えば、この小文の最初に「成立論的関心に傾斜している」とした最近の平家物語研究においても、その後で若干は触れてきたように、覚一本とその他の諸本を対比して文芸性や物語としての方法を考えようとする議論は、決して少ないわけではなく、近似した問題へのアプローチは多様に試みられているように思う。たとえば、前引のような覚一本の「象徴性」や、語り手の作品世界への没入といった点については、比較的早くからごく最近に至るまで、山下宏明氏等によって多角的に論及されている問題に通う面があろう。また、本書の考察対象が「忠度都落」や「祇王」等、従来の研究でしばしばとりあげられてきた章段に関わることも少なくないだけに、著者自身が本書の研究を研究史的に如何に位置づけるのかという点も、気になるところではあった。本書への書評の枠を逸脱して付け加えると、本書所収論文の発表時期と並行して、近似した問題への多彩な論及が、現在進められつつあると思われるので、今後、そうしたごく最近の研究動向をも踏まえた上で、文芸学に立脚した著者の論理がどのように展開されてゆくか、大変興味深い。

さて、覚一本の文芸性・非文芸性をめぐる議論にばかり紙面を費してきたが、本書は決してその点のみを扱ったものではない。諸本論・古態論・祇王説話の広がり等、論点は多岐にわたり、著者の関心の広さを示している。古態論については一～六章の各所でも延慶本等の読み本系の古態が指摘されているが、第七章では「祇王」に関して南都本の古態が、第十章では有王説話に関して四部本の古態が説かれる。特に後者は従来看過されてきた論点への言及を含む点で刺激的であり、私事ながら、この論文とほぼ同時期に同じ部分を扱う拙文を草した私にとっては反省を迫られるものであった。但し、「素朴・単純から複雑へ、複雑から抽象化へ」（一二六頁）という、諸本流動の方向性に対する著者の基本的な見方は、覚一本等を捉えるには有効であるとしても、それ以前の初期諸本の整理にあたっては、なお論理の精密化が必要であるまいか。「素朴」さの認定方法という問題と同時に、中間形態と過渡形態の同一視（たとえば第七章では南都本から延慶本を経て覚一本へ、というコースが示される）の当否にも問題を感じた。諸本の変化が、果たして、ある一定の方向への定まった流れとして捉え得るかどうかということである。もっとも、この点は、現在の平家物語諸本研究全体が抱えている問題であろう。

また、第八章・第九章は、第七章を承けて、祇王説話の広がりを、謡曲『籠祇王』『紀伊続風土記』あるいは『刀後聞』『平家族伝抄』や滋賀県野洲郡の『奴王寺縁起』（略縁起）等々、多くの資料を用いて辿ったものである。地方誌への綿密な目配りが行き届いており、「あとがき」によれば大学院時代には岡見正雄氏の指導を受けたという著者の一方の面目が発揮されているところである。第八章では粉河寺にまつわる法然の伝承（盛衰記等）や、盛久の霊験譚（長門本・謡曲『盛久』）が『籠祇王』に摂取されたことが指摘され、第九章では『平家族伝抄』が盛衰記の影

響を受けつつ「『平家物語』異伝集」として編集されたと説かれる。後者の『平家族伝抄』と盛衰記との関係は、直接的依拠関係の立証としては未だ十分とは言えないように思われるが、興味深い問題提起を含んでいよう。

さて、本書の巻末は、第十一章「平清盛論序説」によってしめくくられる。清盛の「悪」には、「驕り」の心などの「内的要因」と天魔の跳梁する末法の世という「外的要因」とがあること、ヘーゲル等の言う「英雄」の概念にはあまりあてはまらないものの、その片鱗はうかがえること、読み本系では清盛を戯画化する傾向があることが説かれる。第三の戯画化の問題は、重盛との対決の場面における長門本・盛衰記の描写をとりあげたものだが、重盛との対照において清盛が戯画化されるのは、読み本系で増幅されているとはいえ、諸本全体に多かれ少なかれ共通することであろう。これを読み本系の傾向と言うためには、他の部分（たとえばこの章の前半部に引かれる延慶本の清盛権者論など）と、この指摘が如何に関わるか——といった問題が、なお残されているように感じられた。さらに、それが「英雄」造型の問題と如何に関わるか等、本章の残す課題を拾い上げれば論点は多くなろうが、本章は、そうした大きな課題に挑戦しつつ、性急・安易なつじつま合わせを図ることなく、「序説」として著者の基本的な視点に関わる幾つかの問題提起をされたものであろう。それは、とりも直さず、平家物語研究が目指すべき根本的な課題でもある。

「序説」と言えば、この書そのものが『平家物語論序説』と題されるものであった。著者の意図は、本書全体にわたって、平家物語論全般に関わる根本的な問題の数々を提起することにあったかも知れない。ことが文学研究の根本に関わる問題である以上、整理された結論が簡単に出ないのは当然であり、その意味では、性急に結論を求めるかの如き評言に終始したこの小文は、全くの的外れではなかったかと恐れる。本書の如き根本的な問題提起への解答を、自分では全く出し得ぬまま、「序説」のさらなる展開によって教示を得たいと願うばかりの怠惰な後進の感想を記したのみであり、本書の価値を正しく紹介し得なかったであろうことについては、評者の非力を御詫びする他ない。

（一九八五年十月刊、桜楓社、二二六頁、六八〇〇円）

（さえき・しんいち）